

読書感想文 Q & A

夏休みが近づいてきました。読書感想文はどんな本で書くか、決めましたか？構想は練っていますか？

「読書感想文の書き方が分からない」「どんな本を読んだらいいか分からない」「そんな声にお答えします。

さあ、読書感想文にチャレンジしましょう。

Q なぜ、本を読むことが大切なのですか？

A 一冊の本が、人生を変えてしまうことがあります。本の中で旅をしたり恋をしたり、冒険をしたり…。人は本の中でいろいろなことを体験できます。登場人物と自分の生き方や考え方を比べて、共感したり反発したりします。また、本を使って、疑問に思ったことを解決するために調べることができます。本は、人の心を成長させてくれたり、色々なことを教えてくれたりする友だちです。

Q どんな本を読んだらいいのですか？

A 思いっきり楽しめたり、自分を見つめなおしたり、新しいことを教えてくれたり…。自分の心を動かしてくれる本が、その人にとっての「良い本」だと言えます。自分に合った、心を突き動かされる本を探してみよう。迷ったら家族や担任の先生、教科の先生、部活の顧問の先生に相談してみよう。図書館の先生に相談してもいいでしょう。友人と紹介し合うのもいいですね。裏面の「松山西中等教育学校必読30選(B)」のリストも参考にしよう！

Q 読書感想文は何のために書くのですか？

A 書くことによって考えを深められるからです。読書感想文を書くことを通して思考の世界へ導かれ、著者が言いたかったことに思いをめぐらせたり、分からなかったことを解決したりできるのです。ですから読書感想文は「考える読書」とも言われます。また自分自身の記録でもあります。読み返すことによっていつでも「感動した自分」に出会うことができます。

Q 題名はいつつけたらいいのですか？

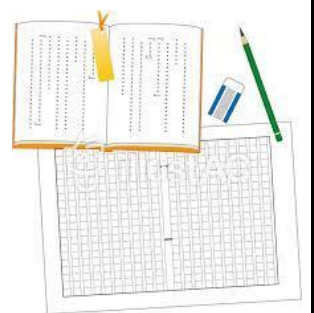
A 本を選ぶとき、本の題名を見ながら「おもしろいかなあ？」とか「読んでみようかなあ？」と考えることはありませんか？題名一つ見ただけで「読んでみたい」とか「読んでみたくない」とか思ってしまう。魅力的な題名は人を引き付ける力があります。せっかく書いた読書感想文ですから、人が読んでみたくなる題名を考えよう。自分が一番感動したことやもっと思いたいことの、中心となる言葉を考えて題名にするとういでしょう。

Q 何をどう書けばいいかわかりません。

A どこに感動したのか、なぜ感動したのかを考えよう。そしてもう一度本を読み返してみよう。自分の生き方や経験と本の世界とを照らし合わせると、いろいろなことが見えてきます。感じたこと、思ったこと、連想したことなどを忘れないうちにメモしておきましょう。そして、順番を入れ替えたり内容を補ったりして、どう書けば自分の思いがうまく人に伝わるかを考えよう。そうするうちに何をどう書けばいいのかわかり、自分が一番言いたいことは何なのかははっきりしてきます。書き終わったときには、それまでとはどこか少し違った自分になっていることに気づくでしょう。

Q 本文や解説を引用していいのですか？

A 読書感想文は、本を読んだ自分の思いや心の動きを中心に書くものですから、できるだけ自分の言葉を使って書きましょう。解説やあと書きは本の世界をより深く理解するために参考になることがあります。そのときは必要な部分だけを引用することにして、必ず「()」(カギかっこ)をつけてください。



必読30選(B)

—文学を中心とし精神を耕し心を豊かにする30冊—

【初級】

『クリスマス・キャロル』(ディケンズ) スクルージはごうつくなく金持ちだ。クリスマス・パーティーなんかお金と時間のむだだと思っている。しかし、親友が死んで幽霊になって現れ、スクルージは考えた。イギリスにクリスマスを復活させた傑作。

『赤毛のアン』(モンゴメリ)プリンス・エドワード島の少女アンは孤児だが想像力豊かな乙女。マッシュウとマリラの家に引き取られ少女時代を過ごす。世界中の人が知っている小説だ。カナダに行ってみたくなるよ。

『モモ』(エンズ)モモは人の話を聞き取る能力を持った女の子。あるとき灰色の時間どろぼうたちが現れて町は大変なことになってしまう。モモはどうやって立ち向かうのだろうか。

『銀河鉄道の夜』(宮澤賢治)童話。ジョバンニはいじめられている男の子。カンパネラだけが友だちだ。気が付くと、ジョバンニはカンパネラと一緒に銀河鉄道に乗り、美しい銀河を旅しているのだった。そして…。

『知恵子抄』(高村光太郎)詩集。愛する恋人にして妻・智恵子と出会い、愛し合い、やがて死に別れるまでを詩におさめている。この最も気高く、しかしあまりにも悲しい愛の結末を、あなたはどうか考えるか。

『坊っちゃん』(夏目漱石)松山が舞台。漱石は明治28年に松山中学の教師になり、その後熊本、ロンドンを経て東京に戻り、明治39年に小説『坊っちゃん』を書いた。真正直な坊っちゃんの大活躍。しかし…。

『杜子春』(芥川龍之介)杜子春は中国の唐時代の都である洛陽の若者。大金持ちであることにあきあきし、仙人になろうと修行するが…。人間にとって大切なものは何かを鬼才・芥川龍之介が問う。

『夏草冬漣』(井上靖)自伝的小説。井上靖は幼いころ伊豆の湯ヶ島に預けられていた。それは『しるばんば』に詳しい。旧制中学時代は沼津に通った。文学や異性へのあこがれに目覚めてゆく季節。あなたの思春期と比べてみよう。

『峠』(司馬遼太郎)幕末の長岡藩に維新軍が攻めて来た。しかし越後の長岡藩は家老・河井継之助を中心に武装中立路線を取ろうとする。結果として、悲惨な内戦となった。薩長中心の中央集権的近代化とは違うもうひとつの近代化の可能性を考えさせる作品。

『母』(三浦綾子)小林多喜二の母を描く。小林多喜二は『蟹工船』で有名なプロレタリア作家。警察につかまり殺された。しかし、その母は…?人間のあり方を問う感動の一冊。

【中級】

『老人と海』(ヘミングウェイ)老人は漁師だ。ただ一人大海原に出かけ、巨大なカジキと激闘の末、かろうじてこれをとらえるが、帰途、サメがカジキを食べてしまう。それでもなお、老人は屈服することはない。人間の威厳を描いた傑作。

『レ・ミゼラブル』(ユゴー)ジャン・バルジャンは軽微な罪で重い刑に服することになった。ミリエル大司教との出会い、回心。貧富の差が大きく惨めな生活を強いられる人々との現場に、バルジャンは名前を変えては現れ高貴な行いを続けていくが…。

『偉大なギャツビー』(フイツジェラルド)ギャツビーは成りあがりの大金持ちだ。毎夜毎夜奇妙なパーティーを開いている。それは、恋する女性デイジーにめぐり合いたい一心からだ。語り手ニックスは株屋、恋敵のトムは大富豪。現代のバブルを思わせる世界の中で、ギャツビーの純愛が悲しい。

『貧しき人びと』(ドストエフスキー)ドストエフスキー文学の入門書として最適。19世紀ロシア、首都ペテルブルグの下町にひっそりと生きる貧しくも心やさしい下級官吏ジエーヴシキンと若い乙女ワルワラの往復書簡。

『蒼穹の昴』(浅田次郎)西太后・李鴻章・梁文秀・春児らが、それぞれに背負っているものために奮闘努力する。天命は誰にあるのか。人間の力は天上の星をも動かしかるのか。人間にとって最も大切なものは何か。歴史のうねりの中で人間の生き方を問う、感動の巨編。

『弟子』(中島敦)子路は孔子の弟子となり、孔子を慕い続ける。純な男だが危なっかしい。最後は衛の国の勢力争いに巻き込まれ絶命する。子路は冠を正して死ぬ。

『人間失格』(太宰治)主人公の葉蔵は本当に惨めな男だ。文字通り「人間失格」だ。だが、読者は感じる。「この葉蔵は自分だ」と読み進めて最後にある人が言う。葉蔵はどんな人だったか?「神様みたいないい子でしたよ」と。この時読者は知る。彼こそが「人間合格」だったのではないか、と。

『沈黙』(遠藤周作)使命に燃え日本に潜入した宣教師ロドリゴは、日本的なるものの厚い壁に阻まれ苦悩する。幕府役人に弾圧され、信者たちが命を落とす。神は沈黙したまま。神よ、なぜ答えてくれないのですか?だが、踏み絵に足をかけるその時…。

『氷点』(三浦綾子)我が子を殺した犯人の娘と知りつつ、医師・辻口は陽子を養女としてひきとる。夫を裏切った妻・夏江への復讐のためだ。陽子はけなげな明るい少女に育つが、真相を知った夏江の残酷ないじめがはじまる。人間の罪深さを問う。『続氷点』には救済が描かれている。

『海辺のカフカ』(村上春樹)15歳のカフカ少年は父親との確執に悩み家を出して四国の図書館にたどり着く。それは自分を愛してくる人を求める旅であり本当の自分を回復する旅でもあった。四国の山中の森で少年が見たものは何だったか。少年は「世界で一番タフな15歳」になれただろうか。

【上級】

『罪と罰』(ドストエフスキー)19世紀、帝政ロシアのペテルブルグの下町。「考えることをしている」とも学生ラスコリニコフは、名前に悪魔の刻印を持った男。超人思想にとりつかれ金貨しの老婆を惨殺してしまう。予審判事ポルフィリイが鋭く迫る。揺れ動く心理。聖なる娼婦・ソニーヤ。異様な人格・スヴィドリガイロフ。泥酔者・マルメラードフ。人間の救済はどこにあるのかを問うた、世界文学の最高傑作。

『バルムの僧院』(スタンダール)イタリアの若き貴族ファブリツィオ・デル・ドンゴは情熱のおもむくままワテルローの戦いに参加、また恋愛事件で殺人を犯してしまう。獄中でクレリアと恋に落ちる。伯母・ジーナはファブリツィオを愛し、宮廷社会で出世せよとする。その結果は…。

『嵐が丘』(エミリー・ブロンテ)19世紀イギリス、ヨークシャーの荒地地。嵐が丘を舞台に繰り広げられる、狂熱の恋と憎しみのドラマ。読み始めると取りつかれたようになって、どうにも止まらない。嵐のような小説だった。同名の別人が複数出てくるので整理しながら読もう。

『復活』(トルストイ)ロシア貴族ネフリュドフがカチューシャを弄んで捨てて。彼女は娼婦となり、殺人を犯してシベリアに送られる。ネフリュドフは罪の意識に目覚め彼女の世話をしようとする。帝政ロシア末期の社会の非人間性を告発しつつ、人間の救済を問おうとしている。

『ジャン・クリストフ』(ロマン・ロラン)クリストフは音楽家だ(ベートーベンがモデルといわれる)。ドイツからフランスへ、クリストフは強い情熱と意志を持って理想を追求し続ける。読み終えて、巨大な交響曲を聴いたと同じような感動が残る作品だ。

『こころ』(夏目漱石)若い「私」は鎌倉の海岸で不思議な「先生」に出会う。「先生」は謎の人だった。「私」は都会の「先生」と田舎の「父」の間で揺れる。やがて明治天皇が崩御し、乃木将軍が自殺した。「先生」から長い長い手紙が届く。「先生」が「私」に残そうとしたものは何だったのか。「私」はどう生きるのか。

『阿部一族』(森岡外禁)禁止された殉死を罪に問われ、阿部一族は武士の意気地を見て立ち上がる。森岡外は武士の子孫として、大正デモクラシーの時代に、あえて古き良き武士道日本のロマンを描こうとした。明治末の乃木将軍切腹に刺激されたものであろう。

『俘虜記』(大岡昇平)大岡昇平はフィリピン島のミンドロ島でアメリカ兵士と遭遇するも撃たなかつた。やがてアメリカ軍の捕虜となりレイテ島の収容所で生活する。この間のことを小説にしたもの。

『黒い雨』(井伏鱒二)ヒロシマの被爆者は差別された。被爆者・閑間(しずま)重松は姪の矢須子が被爆していないことを証明するために八月の日記を綴り直す。だが、矢須子はそのあとの黒い雨に打たれていた。再生の祈りを込めた作品。

『墮落論』(坂口安吾)史上最も清潔な帝国であるかに見せかけて実際は墮落していた大日本帝国は滅んだ。武士道は「生き延びるよりも死ぬ」と教えた。だが、安吾は叫ぶ。偽りの道徳を破壊してでも「生きよ、落ちよ」「生きていくことが一番尊いのだ」と。そこには実は生を肯定する真に高貴なモラルがある。



